

広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第68号 2019 19-26

女性・母親に向けられる アンコンシャス・バイアスという眼差し

中坪史典・木戸彩恵¹・加藤 望・石野陽子²
(2019年10月3日受理)

Unconscious Biases Affect Women and Mothers

Fuminori Nakatsubo, Ayae Kido, Nozomi Kato and Yoko Ishino

Abstract: The purpose of this study is to sketch unconscious biases that affect women and mothers. As a result of this study, the following points become clear: (1) Unconscious biases also inform social norms and roles in women's dress and makeup. Women accept them unconsciously. (2) The unconscious bias that "childcare is the responsibility of women" is still strong today. Therefore, mothers tend to feel guilt about their children. Mothers also hesitate to leave their children at daycare as a rest for themselves. (3) The unconscious bias that "childcare is the responsibility of women" causes various forms of maternal guilt. However, previous studies have not shown that mothers who work have a negative effect on their children's development. These unconscious biases have been created by the social environment and culture and have an impact on the formation of our values and stereotypes. We need to think about the issues that women and mothers face by recognizing our unconscious biases.

Key words: Unconscious bias, Women, Mothers

キーワード：アンコンシャス・バイアス, 女性, 母親

1. はじめに

2019年4月13日に行われた東京大学入学式における上野千鶴子氏の祝辞は、同大学がネット上に全文公開した直後から反響を呼んだ。同氏は「男子学生は東大生であることに誇りがもてるのに、女子学生は自分の成績が良いことや東大生であることを隠そうとすること」「男性の価値と成績の良さは一致するのに、女性の価値と成績の良さの間にはねじれがあること」「東京大学入学者の女性比率は、長期にわたって2割の壁を越えないこと」「4年制大学進学率そのものに性別ギャップがあり、この差は成績差ではなく、息子は大学まで、娘は短大まででよいと考える親の性差別の結果であること」など、同大学の女子学生が置かれる現

実を指摘する(上野 2019)。

雨宮(2018)によれば、この国の女子は呪われているのだと言う。男性が子育てすればイクメンともてはやされるのに、女性が仕事と子育てをしても誰も褒めてくれない。「保育園に落ちた日本死ね!」と叫びながら泣く泣く仕事を辞めるのはいつも女性であり、それで仕事を辞める男性というのは聞いたことがない。仕事ができる女性とはときに「女のくせに」「女だてらに」と揶揄されるのに、女らしい気配り、装い、身ぎれいさは当然のように要求される。セクハラには場の空気を壊さないよう笑顔であしらう技術が求められ、それがあたかも大人の女のたしなみのように思われる。仕事を続けたら続けたで「旦那さんの理解があって良いわね」と言われ、しかし、育児や介護を必要とする家族がいたら仕事を続けていることを責められる。

佐光(2017)は、育児や家事は男性にもできるのに、新卒の就活時から結婚や育児のことを考えなければな

¹関西大学文学部²高根大学教育学部

らないのはもっぱら女性であると指摘する。また、家事の外部化が子どもをダメにするという刷り込みが女性や母親に過度な圧力を与えることから「きちんと家事」は無視してよいと主張する。以上のように、現代においてもなお日本では、女性や母親でいることがしんどい状況が数多く存在する。

ところで、女性や母親を生きづらくする背景の一つに、アンコンシャス・バイアス (Unconscious bias) という眼差しがあることが考えられる。これは、人がある社会集団に対して有する固定観念のことである。自分や他者を判断する際、過去の経験、社会・文化的習慣、環境などから自身が気付かずに生じる偏った見方や考え方、ステレオタイプに基づく偏見のことであり、マイナスのインパクトを生じさせる (Filut, Kaatz & Carnes, 2017)。内海 (2018) によれば、中高一貫女子校の理系進学者が共学校のそれと比べて飛躍的に多いのは、「男子は理系」「女子は文系」という先入観が排除され、女子だけの集団で自由に自分の適性や志向と向き合っただけで進学先を決めることができるからだと言う。日本では、科学的根拠があるとは言えないにもかかわらず、「女子は理系より文系が得意」「男性はリーダーに向いている」「育児は女性がする方が良い」「男性は家事が下手」「男性は妻子を養う収入がなければ結婚できない」「女性は仕事より家庭を優先した方が良い」「女性は細やかな心遣いができる」「子育て中の女性は泊まりがけの出張は無理だろう」など、ジェンダーをめぐる様々な無意識の偏見が存在する (荻田 2018)。

以上を踏まえて本研究は、女性や母親に向けられるアンコンシャス・バイアスという眼差しについて、その具体的様相を素描することを目的とする。本研究がアンコンシャス・バイアスという視点を通して、私たちの中に潜在する価値観や固定観念を意識化することで、今日の社会的環境や文化が生み出す問題点や課題に光を当てることができる。

本稿の執筆分担は、次の通りである。中坪史典 (第1章、第5章)、木戸彩恵 (第2章)、加藤望 (第3章)、石野陽子 (第4章)。

2. 女性の装いに向けられるアンコンシャス・バイアス

本章では、女性の装いに向けられるアンコンシャス・バイアスの背景と実際について先行研究をもとに素描するとともに、自己隠蔽に傾きがちな女性の装いを自己表現に向けるための可能性について検討する。

2.1 女性に向けられるアンコンシャス・バイアスの背景にある差別・偏見

女性に向けられるアンコンシャス・バイアスの背景には、文化的に根強い差別・偏見が存在する。北村・唐沢 (2017) によれば、そうした差別・偏見の特徴は、5つの観点にまとめることができる。第一に、男女割合はほぼ半々であるため、マイノリティ集団に対する差別や偏見ではないこと。第二に、男女関係は個人レベルでは敵対的ではなく、むしろ親和的で協動的である場合が多いこと。第三に、性別に対する規範的ステレオタイプが存在すること。第四に、成人男性のステレオタイプには明確なサブカテゴリーが存在しないのに対して、女性には独身、専業主婦、ワーキングマザーなどのサブカテゴリーが存在し、それぞれ異なったステレオタイプがもたれていること。そして第五に、ステレオタイプや社会的役割を、ある程度女性自身が受容していることである。

また、北村・唐沢 (2017) は、女性に向けられる差別・偏見は、男女ともに受け入れられていることが特徴的であると指摘する。つまり、女性に向けられる差別・偏見は、男性から女性に向けられるだけでなく、女性から女性にも向けられるものである。さらに言えば、女性に向けられる差別・偏見は、一人称としての自身に向ける認識においても、二人称・三人称の女性同士あるいは男女間に向けられる認識 (例えば、「女子は理系より文系が得意」という認識は、男性が女性に向けるだけでなく、女性が女性に向ける際にも使われる) としても存在するものであり、それゆえにより強い持続性をもつ差別・偏見と成り得る。

具体的には、日常生活においても「女性はにこやかである」「女性は身ぎれいであるべき」という言説を耳にすることは少なくないだろう。こうした言説の背景として「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業の意識が共有されており、女性には男性から守られる立場となること (= 被支配) を正当化するとともに、相補的で補助的な役割に必要な「温かさ (共同的特性)」が求められることがうかがえる。女性を守られるべき立場とする考え方は、特定の望ましい特性 (作動性低ポジティブ特性: 可憐さ、純真さ) を女性に付与する。それが翻って「保護的家父長主義」として知られる、女性の補助的役割および地位の低さを維持する文化的装置として機能していると考えられる。そのため、今日に至るまで女性には「温かいが無能である」こと (相補的ステレオタイプ) が役割として求められてきた。

一方、地位の高い女性は「有能だが冷たい」という印象を抱かれやすい傾向があった。例えば、専業主婦や補助的職業 (客室乗務員や看護師など) に就く女

性は、他者から親密さや好意をもたれやすいのに対して、フェミニストやキャリア志向の女性は、敵意的偏見をもたれやすい傾向があるとされてきた。結果として、社会的地位の上昇に関して女性自身の力ではなく男性に依存しやすく、経済的に自立していこうとする意思が弱くなる。この現象は「ガラスの靴効果 (Glass slipper effect, Rudman & Heppen, 2003)」と呼ばれる。現状の女性に向けられる眼差しが正当化され続ける限り、こうした相補的ステレオタイプが女性に期待される役割となる。他者が個人に対して、その地位や職業などに応じてなされるはずの行動を期待するとき、その期待のことを役割期待という。

2.2 社会から期待される装い

役割期待は、私たちが装いを選択するときの一つの動機と成り得る。装いの選択は、1 次的動機 (生得的な動機) と 2 次的動機 (私たちが日常生活で行なっている装いの選択の動機) に分けられる。日常の装い選択には、価値観や感覚・感情のような個人的要因、印象管理のような対人的要因、社会的規範のような社会・文化的要因などが複合的にかかわる (小林・藤田 2017)。例えば、「TPO に合わせた装い」は、その場にふさわしいと自他共に認められることを志向する装いであり、ふさわしいと判断する一つの基準として自身の役割期待があると考えられる。

しかし、行為の結果として自身の認識と周囲の期待が一致しない場合もある。役割期待に添えていない場合、役割葛藤が起こるとされる。なぜなら、役割期待に基づいて装いを選択する場合、道徳的、倫理的などの面から総合的に捉えてそのふさわしさを判断するための社会規範が必要になるからである。社会規範は社会や集団の中で、ある事柄に関して妥当あるいは適当と人々に期待されている行動をとる際の基準になる。

装いは、様々な情報を他者に伝達する。装いに人は自己概念やパーソナリティを投影しようとする。例えば、外交的で自尊感情の高い人はファッションブルな着こなしをし、流行の採用も早い傾向がある。これに対して、内向的で自尊感情の低い人は目立たない控えめな着こなしをし、流行の採用も遅い傾向にあるとされる。このような観点から、装いに投影される自己概念やパーソナリティが無意識的な偏見ともつながると考えることは自然である。

特に、キャリアという観点から捉えた場合、女性らしい装いはネガティブなインパクトをもたらすものと見なされるという研究結果もある。具体的には、キャリア志向の女性が女性らしい服装をすると、上位職の選考で不利益を被ることがある (Glick, Johnson &

Branstiter 2005)。女性が男性用の香水をつけるとリーダー職にふさわしいという評価を得るが、女性用の香水をつけるとそうはいかない (Scznsny, Spreemann & Stahlberg 2006) などである。社会的には男性中心のキャリア志向が根付いていることは言うまでもないが、キャリアを志向する女性にとってもその身体表象として男性的である場合に好ましく判断されるのである。

これには、男性がビジネスの場で着用するスーツが定番化している影響が考えられる。スーツは、フランス革命 (1789年) 以後「市民の制服」として定着したファッションであり、複雑な組織におけるジレンマ解消を主としてデザインされた道具である。この頃から、男性は経済の担い手、女性は男性を補佐する役割とされている。近代原理にもとづく装い観により市民としての社会的義務を目的として装う身体表現 (石田, 2005) は、男性的であることが通常求められるため、女性らしくフェミニンに装うことは、場違い感を生み出すものと考えられる。これに関連して、小林・藤田 (2017) において装いの場違い感は、異なる服装をしている相手側の人数が全体 25% より多くなると認識され始めることが報告される。相手側の人数が多くなるに従って場違い感が強くなり、また、集合がグループ化していくと場違い感を感じやすくなる。キャリア志向の女性に還元して考えると、女性活躍推進法は女性の管理職を 2014 年の 11.3% を 2020 年までに 30% にするという目標を掲げているが、現段階では未だビジネス場面においては「女性」らしく装うことで場違い感を認識することは少なくないと考えられる。

2.3 対人的相互作用を円滑にするための装い

女性に向けられる差別・偏見の観点からは、男女間における認識のみならず異なるサブカテゴリーを生きる女性同士の装いに対する認識の違いも問題となる。社会規範に触れることの怖さについて Rudman & Fairchild (2004) は、女性としての規範に触れることで社会的に辛い立場に立たされることに加え、女性自身が経験したバックラッシュ (ゆり戻し) 現象 (Faludi, 1991/1994) の怖さを研究した。バックラッシュに対する恐怖感が働くことで女性は、再び自分を抑えて振る舞い、その結果、ジェンダーに関する規範は維持される。結果として、逸脱に対する恐れから、サブカテゴリーを含む社会的文脈において目立たない装いをすることが無難と判断される傾向となると考えられる。

先にも述べたように、装いは身体表現の一つである。しかし、日本人は文化的に横並び意識が強いため、許容範囲からの逸脱に対する抵抗や圧力が強く、しかも

許容範囲も非常に狭いといえる。結果として、装う際には自己表現ではなく、自己隠蔽に傾きがちになる傾向となると考えられる。自己隠蔽の観点から捉えると装いは、周りの人と協調するためのツールとなり、自分の一面を隠し「みんなと同じ」という安心感を得るために使われるものとなる。

2.4 装いは女性のエンパワメント・ツールに転換できるのか

一方、自己表現のための装いを考えると、装いは自分らしさを表現するツールとなる。みんなと違うことで周囲から抵抗や圧力を受ける可能性があるものの、自分の一面を強調し表現するために用いることができる。装いは文化である。鷲田(1997)によれば、文化の語源は、Culture(文化→耕す)であるとされる。ファッションは文化的行為であり、私たちは、身体表面を耕し、新たに整地しなおすことができる。自分の力でアンコンシャス・バイアスに気づくためにも、今一度自身の価値観に基づく装いをバックキャスト(こうなりたい自分)思考で考えてみる必要がある。なぜなら、伝統は私たちに「意味」の可能性を与えるが、何をすべきかを決めさせるわけではないからである。

近年、セクシャル・ハラスメントや性的虐待を告発する「#MeToo(私もです)」運動にならない、女性の就業時にパンプス着用強制をなくすための「#KuToo(靴、苦痛)」運動が展開されるなど、女性のキャリアを支えるための装いの見直しを求める声も上がり始めた。私たちは自分自身だけでなく他者との「パフォーマンス」を通じて、理にかなった現実を作り出す。Gergen & Gergen(2004/2018)が社会構成主義の観点から、かつては「精神的なプロセス」とされた個人的な問題が「関係的なプロセス」という社会的問題に「再創造される」と述べたように、アンコンシャス・バイアスという概念に基づいて議論を深めることで、女性の装いのあり方を再創造させるきっかけがもたらされることを期待している。

3. アンコンシャス・バイアスが阻む母親のリフレッシュ

本章では、母親に向けられるアンコンシャス・バイアスを考察するとともに、いかに日本の母親が窮屈な思いで育児しているのかについて素描する。

3.1 家事育児を担う母親の過酷な現状

労働基準法(東京労働局, 2015)によれば、8時間以上勤務する場合、少なくとも1時間以上の休憩が必

要であることや、休憩時間を除いて1日に8時間以上の労働をすることは禁止されている。この基準を、筆者が第一子出産後、専業主婦として家事育児を担っていた状況と照らして考えてみたい。

朝6時起床、朝食の支度をし、洗濯を済ませ、夫の出勤後子どもを起こす。おむつを替え、離乳食を食べさせて授乳をする。午前中天気が良ければ公園へ散歩に出かけ、帰宅後に昼食(離乳食)の準備や授乳をする。夏は汗疹予防のため、午前中にも子どもにシャワーを浴びせる。子どもが午睡している間に昼食の片付けと部屋の掃除をし、子どもが目覚めればおやつ準備をして食べる姿を見守り、その後はスーパーへ買い物に出かける。帰宅して洗濯物を取り込み、夕食の支度をする。夕食後は片付けをして洗濯物を畳み、お風呂の支度をする。こうして23時に就寝するまでの家事育児従事時間は、1日12時間以上にもなる。一般企業に雇用される会社員の夫は、残業や出張により帰宅が21時を過ぎることが多く、核家族ゆえに一人で家事育児を担う。特に乳児では、夜中も授乳が必要なこともあり「深夜業務」も必要となる。また、家事はともかく育児に至っては、国民の休日であっても体調不良であっても、確実に休める保障はない。発熱により自分のこともままならない状況で、授乳やおむつ替えに必要な乳児と二人きりで過ごした経験は、今振り返っても過酷であり、労働基準法を越えるものであった。

特に産後の母親をめぐっては、睡眠時間が不規則かつ短時間となるため、睡眠不足の欠如が産褥精神障害の一種であるマタニティブルーズを引き起こす一因でもあることが指摘される(広瀬・木村・関沢・赤松・白川・齋藤・矢内原 2000)。休憩時間の確保や年休取得の権利に関する取り決めが労働基準法に明記されるように、休憩や休養は人間が健康を害することなく働くために必要であるが、家事育児を専業として担う場合にはそれが担保されない。専業主婦の家事育児が労働でないことは言うまでもないが、加えてその過酷さを理解する必要があるだろう。

3.2 社会に根強く残る「育児=母親が担う」というアンコンシャス・バイアス

日本の家事育児従事時間は、平均して母親(女性)が長く、父親(男性)は先進国の中で最低水準である(内閣府 2016)。また、この育児時間の中には「子どもと遊ぶ」という項目も含まれており、父親(男性)の育児時間1日平均83分は、1週間に換算すると9時間強となる。例えば、休日に1日子どもと遊んだだけで父親(男性)の平均育児時間と同等になってしまう。現に育児時間の構成比を男女別にみると、母親(女性)

は「乳幼児の身体の世話と監督」が49.5%を占めるのに対して、父親（男性）は「乳幼児と遊ぶ」が育児時間の44.4%を占めている（総務省 2017）。

このように育児は、時間の長さだけでなく内容についても母親に負担がかかっており、こうした背景には「育児＝母親が担う」というアンコンシャス・バイアスが影響していることが考えられる。しかし、専業で家事育児を担う母親の中には、就業意欲はあっても家庭状況として就業することが難しいために無業であるという現状もある（内閣府男女共同参画局 2015）。

他方、育児しながら働く母親の中には、子連れ出勤という方法を選択する者もある。その様子を視察した子育て支援担当政治家が「乳児は母親といるのが一番」と発言し、物議を醸した（東京新聞 2019）が、この視察自体、子どもを職場に連れていく対象が母親であり「育児＝母親が担う」というアンコンシャス・バイアスが潜んでいることが考えられる。母親の子連れ出勤は、勤務中であっても子どもを気にかける役割を母親が担うことになり、ますます「育児＝母親が担う」構図が助長されかねない。こうして母子を密着させることで責任を母親に押し付け、疲弊させるのである。

3.3 アンコンシャス・バイアスによって阻まれる母親のリフレッシュ

母親が担う育児時間の長さや内容は、父親よりも負担が大きいことから、家事育児を専業とする場合であっても休養をとる必要がある。そのため日本では、保護者の身体的・心理的疲労の軽減を目的とした一時預かり事業の利用が可能とされている。このリフレッシュ目的による一時預かり事業の利用は、保護者の育児に肯定的な変化をもたらすことが明らかにされる（松岡・櫻谷 2004）一方で、一時預かり事業を利用したことがない保護者にとっては、利用を阻む要因もあることが指摘されている（e.g. 小池・角張・齋藤 2018）。

(1) 母親自身のアンコンシャス・バイアス呪縛によるリフレッシュの躊躇

例えば、ウェブサイトの相談窓口に「保育所の一時的預かりを利用してリフレッシュするのって悪いことですか？」という母親からの相談がある（Yahoo! 知恵袋 2018）。なぜ母親は、保育所に子どもを預けて自分がリフレッシュをすることを躊躇するのだろうか。

母子健康手帳の記述変遷を研究した元橋（2014）によると、1995年以降、父親の育児を推奨する日本社会の風潮から母子健康手帳内においても「親」「ふたり」といった呼称を積極的に使用するものの、これは見せかけであり、依然として妊娠した女性に母親役割を期

待して母子健康手帳が配布されているという。その内容についても、子どもの発達発育に関して母親に注視と気配りを要請するものであり、母親は我が子に対して応答的であることや、子どもを中心とした育児を行うことが妊娠期から課せられていると指摘する。日本の子育ては親の裁量で行われていた時代から、子どもの要求に応えることを重視する時代になり、親にとってはより厳しい育児水準を求められている。

仁科（2018）によると、こうした子ども中心の規範、母親の選択や責任が強調される価値観によって母親は、子どもの預け先を決める際にも自身の選択や責任を感じた上で決定しなければならない負担を強いられているという。子どもが安全に成長していくことに対する責任を母親が一人で負おうとすると、我が子の健やかな成長を見ず知らずの他者（保育者）に任せることは、より難しい選択となるだろう。こうした社会的背景が母親を「保育所の一時的預かりを利用してリフレッシュするのって悪いことですか？」と質問したくなるようにしている。つまり「育児＝母親が担う」というアンコンシャス・バイアスによって、母親は自らのリフレッシュを躊躇するのである。

(2) 社会が抱くアンコンシャス・バイアスに阻まれる母親のリフレッシュ

一時預かり事業は、国の子育て支援政策の一環である。しかし、その運営は各自治体に委ねられており、現実的な利用に関しては、申込手続きが煩雑だったり、実施していない自治体も存在したりなど、万人が容易に利用できる制度には至っていない（加藤・中坪 2018）。前述の母親相談に対する回答の中には、「子どもを預ける＝お前はダメな母親だ」「子どもを厄介払いして恥ずかしい母親だ」といったものもある。また、リフレッシュ目的による一時預かり事業利用を受け付けていない保育所の施設長の中には、その理由を「明確な理由がない場合、子どもの養育は保護者が担うべき」としている（Kato, 2018）。これには、日本の子育て支援政策が子育てに関する第一義的な責任は保護者にあることを前提に成り立っている（藤間 2018）ことも影響しているだろう。さらに、近隣の保育所がリフレッシュ目的での一時預かり事業を実施していない場合、保護者はリフレッシュのために保育を利用する機会すら得ることができない。このように育児環境を取り巻く周囲の人間によって母親のリフレッシュが阻まれることもある。

このように「育児＝母親が担う」というアンコンシャス・バイアスは、育児期の日本の母親をリフレッシュしにくい状況に置いてしまうのである。

4. 母親罪障感を喚起させるアンコンシャス・バイアス

本章では、母親罪障感を確認しながら、それが喚起される背景と、喚起された後の母親の意識について素描する。

4.1 子どもに対する母親の申し訳なさ

例えば、あるお母さんが、その日の夕食を簡単に用意したとして、その夕食を「今夜はこんなのでごめんね」と言いながら子どもに済まなさそうに提供したとする。このように、母親が日常生活の中で素朴に感じる子どもに対する「申し訳ない」「心苦しい」といった感情や情動を母親罪障感と言う（石野 2007）。この母親罪障感は、適度であれば子どもとのより良い関係を維持しようと働くこと、また、子どもの年齢によってその喚起される場面が変化することが明らかにされている（石野 2006；石野・神田 2009）。

特に就学前児の母親について焦点を当てると、母親罪障感が喚起されるのは、子どもがやる気になった時に否定的なことを告げたときのような「子の性格・状況否定場面」、母親自身のために時間を使うときのような「脱母親役割場面」、長時間子どもを預けたときのような「母親役割不足場面」に大別される（石野 2005）。「子の性格・状況否定場面」と「母親役割不足場面」は、母親役割を遂行する中での後悔の念から喚起される罪障感である。一方、「脱母親役割場面」は、育児や家事、あるいは日々の生活から解放されて気分転換しようとするときに喚起される罪障感である。一時的に、とはいえ、母親が積極的に子どもから離れることを実行したり考えたりした際に喚起される場面であり、先の二場面とは背景が異なる。伝統的な性役割観を強くもっている母親は、平等主義的な性役割観を強くもっている母親よりも母親罪障感が強く喚起されることも明らかにされており（石野 2007）、良い母親であらねばならないという思いが母親に役割葛藤を起こさせ、強い罪障感を抱かせることが考えられる。

4.2 アンコンシャス・バイアスとしての三歳児神話

では、なぜ良い母親であらねばならないと感じて母親罪障感を抱くかということ、子どもが3歳になるまでは母親は子育てに専念すべきであり、そうしないと子どもの成長発達に悪影響を及ぼすという考え方である三歳児神話が根底にあることが挙げられよう。

大日向（2002）によれば、三歳児神話とは、「子どもの成長にとって幼少期は最も重要だから」「この大切な時期は生みの母親が養育に専念しなければなら

い。なぜならお腹を痛めたわが子に対する母の愛情こそ子どもにとって最善だから」「母親が就労などの理由で育児に専念しないと、将来子どもの発達に悪い影響を残す場合があるから」の三点にまとめられる。

4.3 三歳児神話は本当か

三歳児神話の三点目「乳幼児をもつ母親の就労は、子どものその後の成長発達に悪影響を及ぼすのか」の真偽については、様々な研究がなされている。例えば、乳幼児の母親の就労は、小中学生時の学力とは負の相関があるが、親から見た子どもの問題行動や向社会性、QOLとはあまり関係がなく、子どもが中学生になると関係はなくなるという研究（野崎 2013）や、母親が子育て期も就労を継続した方が子どもの独立心は高いという研究（末盛 2001）などがある。

このように、子どもが幼い頃における母親の就労が、子どもの発達全般に悪影響を及ぼすとは言い切れない、ということが諸研究から示されている。

4.4 母親を追い詰めるアンコンシャス・バイアス

子どもが幼い頃に母親が子育てに専念しないことは、子どもの成長発達へ悪影響のみを及ぼすわけではないことは諸研究で示されている。にもかかわらず、その客観的な研究成果よりも、三歳児神話が社会に広く浸透しているのはなぜか。それは、幼い頃の性格は齢を重ねても変わらないという意味の「三つ子の魂百まで」という諺が日本人には古くから親しみ深く受け入れられていることや、Bowlbyの愛着理論が都合よく解釈される場合があることが関係しているとも考えられる。子どもにとっての祖父母に当たる上位世代からの意見や願いは無碍にはできず、夫など同居家族も自然に母親へ期待をかけるようになる。これらの心情や状況を受けて、母親は考え悩み、時に母親罪障感を喚起させ、多大な責任を自ら負おうとする。

子どもが幼い頃は母親が子育てに没頭すべきであり、そうでなければ子どもの成長発達に悪影響を及ぼすというアンコンシャス・バイアスは、当の母親本人にも家族にも社会にも深く浸透しているように思われる。それらは時として、母親が育児を楽しみに思う気持ちや、親として自然に抱く責任感を越えて、母親を追い詰め、母親罪障感を過度に喚起させ、育児期ストレスや育児期うつ症状を引き起こしかねない。

5. おわりに

女性や母親に向けられるアンコンシャス・バイアスという眼差しの具体的様相を素描することで、今日の

社会的環境や文化的課題について、次の点を指摘することができる。

第一に、アンコンシャス・バイアスが女性の装いにも社会的規範や役割を付与しており、女性もまた、それらを無自覚に受け入れていることである。この点を踏まえるとき、例えば、女性の就業時にパンプス着用の強制をなくすための「#KuToo(靴、苦痛)」運動が展開され、女性のキャリアを支えるための装いの見直しを求める声が上がりはじめたように、今後アンコンシャス・バイアスを自覚する気運が高まることで、女性らしさを求められる装いに転機が訪れることが期待される。私たちは、アンコンシャス・バイアスを盾にすることで、女性の装いの再創造が可能となる。

第二に、「育児＝母親が担う」というアンコンシャス・バイアスによって母親は、制度として存在するリフレッシュ目的による一時預かり事業の利用すら阻まれており、その背景には、母親自らが利用を躊躇したり、社会が母親に対して利用の躊躇を助長したりしていることである。とは言い、「乳児は母親といるのが一番」という子育て支援担当政治家の発言が物議を醸したように、今後アンコンシャス・バイアスを自覚する気運が高まることで、母親が躊躇することなくリフレッシュできる日が来ることが期待される。私たちは、アンコンシャス・バイアスを盾にすることで、母親の育児呪縛からの解放が可能となる。

第三に、「育児＝母親が担う」というアンコンシャス・バイアスによって母親は、一時預かり事業の利用だけでなく、様々な罪障感を引き起こしていることである。ここで重要なことは、子どもが幼い頃における母親の就労は、必ずしも子どもの成長発達に悪影響を及ぼすわけではないという研究結果が存在する点である。今後アンコンシャス・バイアスを自覚する気運が高まることで、母親罪障感の軽減や払拭が期待される。私たちは、アンコンシャス・バイアスを盾にすることで、三歳児神話からの解放が可能となる。

このように私たちは、社会や文化の中に潜在するアンコンシャス・バイアスを認識し、それをツールとして掲げることで、女性や母親を生きづらくする背景と対峙することができる。今日の社会や文化が生み出す課題を浮き彫りにする装置としてアンコンシャス・バイアスを機能させることで、ダイバーシティ推進の地平が拓かれるのではないだろうか。

最後に、本稿では、女性であれば装いを中心に、母親であればリフレッシュ目的の一時預かり事業や母親罪障感を中心に、アンコンシャス・バイアスの様相を素描した。逆に言えば、結婚や就職などライフイベントについては検討が及んでおらず、この点は今後の検

討課題としたい。

【引用文献】

- 雨宮処凛 2018 『「女子」というのろい』, 集英社
- Faludi, S. 1991 Backlash: The Undeclared War against American Women, Broadway Books: NY.
- Faludi, S. 1994 『バックラッシュー逆襲される女たち』, (伊藤由紀子・加藤真樹子訳), 新曜社
- Filut, A., Kaatz, A. & Carnes, M. 2017 The Impact of Unconscious Bias on Women's Career Advancement. The Sasakawa Peace Foundation Expert Reviews Series on Advancing Women's Empowerment.
- 藤間公太 2018 「子ども・子育て支援政策の論理と問題」, 『教育』, 第873号, 43-49頁
- Gergen, K.J. & Gergen, M. 2004 Social Construction: Entering the Dialogue: Taos Institute Publications. (ガーゲン&ガーゲン 2018 『現実はいつも対話から生まれる』, (伊藤守・二宮美紀訳), デイスクヴァー・トゥエンティワン)
- Glick, P. Larsen, S. Johnson, C. & Branstiter, H. 2005 "Evaluations of Sexy Women In Low- and High-Status Jobs", *Psychology of Women Quarterly*, 29, pp.389-395.
- 広瀬一浩・木村武彦・関沢明彦・赤松達也・白川修一郎・齋藤裕・矢内原巧 2000 「産褥期睡眠障害とマタニティブルーの経時的推移に関する研究」, 『日本産科婦人科学会雑誌』, 第52巻, 第4号, 676-682頁
- 石野陽子 2005 「就学前児の母親がもつ罪障感の構造－就労状況との関連－」, 『家族心理学研究』, 第19巻, 第2号, 128-140頁
- 石野陽子 2006 「子どもに対する母親の罪障感と社会的援助資源－子どもの年齢による差異－」, 『コミュニティ心理学研究』, 第9巻, 第2号, 164-177頁
- 石野陽子 2007 『母親が子どもに抱く罪障感の心理学的研究』, 風間書房
- 石野陽子・神田直子 2009 「小学校低学年児童の母親の子育て罪障感と子どもの発達障害傾向－「第4回愛知の子ども縦断調査」より－」, 『愛知県立大学児童教育学科論集』, 第43号, 23-31頁
- 石田かおり 2005 「岐路に立つ「メトロセクシャル」」, 『駒沢女子大学研究紀要』, 第12号, 1-13頁
- Kato, N. 2018 "A Study on the Contents and Management Approaches to System of Temporary Childcare in Japan" 28th EECERA (European Early Childhood Education Research

- Association) ANNUAL CONFERENCE.
- 加藤望・中坪史典 2018 「なぜ日本の乳幼児子育て期の保護者はリフレッシュ目的で一時的預かり事業を利用しにくいのか?」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域)』, 第67号, 57-64頁
- 菊田香苗 2018 「アンコンシャス・バイアスという見えない壁」, 『日本健康学会誌』, 第84巻, 第3号, 79-80頁
- 北村英哉・唐沢穰 2017 『偏見や差別はなぜ起こる?: 心理メカニズムの解明と現象の分析』, ちとせプレス
- 小林茂雄・藤田雅夫編 2017 『装いの心理と行動』, アイ・ケイコーポレーション
- 小池由佳・角張慶子・齋藤裕 2018 『子育て支援における「支援につながらない保護者」への支援モデル構築をめざして』, 新潟県立大学研究報告書
- 松岡知子・櫻谷真理子 2004 「保育所における一時保育を利用した母親の意識調査」, 『立命館人間科学研究』, 第7号, 13-24頁
- 元橋利恵 2014 「男女共同参画」時代の母親規範: 母子健康手帳と副読本を手がかりに, 『フォーラム現代社会学』, 第13巻, 32-44頁
- 内閣府 2016 「夫の協力」, <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html> 2019/06/12閲覧
- 内閣府男女共同参画局 2015 第1節 「就業をめぐる状況(女性の就業希望者)」, http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h27/zentai/html/honpen/bl_s02_01.html 2019/09/04閲覧
- 仁科薫 2018 「子育ての困難とケアの倫理に基づく子育て支援政策の可能性-子どもの預かりをめぐる母親たちの語りの分析から-」, 『国際ジェンダー学会誌』, 第16巻, 81-102頁
- 野崎華世 2013 「乳幼児期における母親の就業が子どもの成長に与える影響」, 樋口美雄・赤林英夫・大野由香子・慶應義塾大学パネルデータ設計解析センター編 『働き方と幸福感のダイナミズム-家族とライフサイクルの影響-』, 慶應義塾大学出版会, 103-120頁
- 大日向雅美 2002 『母性愛神話とのたたかい』, 草土文化
- Rudman, L. A. & Fairchild, K. 2004 "Reactions to Counterstereotypic Behavior: The Role of Backlash in Cultural Stereotype Maintenance", *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, pp.157-176.
- Rudman, L. A. & Happen, J. B. 2003 Implicit romantic fantasies and women's interest in personal power: a glass slipper effect?, *Personality & Social Psychology Bulletin*, 29, 1357-1370.
- 佐光紀子 2017 『「家事のしすぎ」が日本を減ぼす』, 光文社新読書
- Szesny, S., Spreemann, S. & Stahlberg, D. 2006 "Masculine = Competent? Physical Appearance and Sex as Sources of Gender-Stereotypic Attributions". *Swiss Journal of Psychology*, 65, pp.15-23.
- 総務省 2017 「平成28年社会生活基本調査 詳細行動分類による生活時間に関する結果 要約」, 『報道資料』, <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/youyaku3.pdf> 2019/08/08閲覧
- 末盛慶 2001 「母親の就業は子どもに影響を及ぼすのか-職業経歴による差異-」, 『家族社会学研究』, 第13巻, 第2号, 103-112頁.
- 東京労働局 2015 『労働基準法のあらまし』, 8頁
- 東京新聞 2019 『母親の負担増すだけ』 02月02日朝刊 茨城版, 18頁
- 上野千鶴子 2019 「平成31年度東京大学入学式祝辞」, https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html 2019/09/12閲覧
- 内海房子 2018 「アンコンシャス・バイアスって何?」, 『工学教育』 第66巻, 第2号, 96頁
- Yahoo! 知恵袋 2018 「保育園の一時預かりを利用してリフレッシュするのは悪いことですか?」, https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12199100782?query=%E4%B8%80%E6%99%82%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E3%83%AA%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A5&status=solved 2019/06/14閲覧
- 鷺田清一 1997 『ひとはなぜ服を着るのか-文化装置としてのファッション』, NHK 人間大学テキスト

【付記】

本稿は、日本発達心理学会第30回大会ラウンドテーブルで行った話題提供がもとになっている。指定討論者として貴重なコメントを頂いた藤川奈緒子氏(ガールスカウト日本連盟)に感謝申し上げます。